

第2回室戸ジオパーク認証記念 地学巡検

1 はじめに

室戸ジオパークは、平成20年に日本ジオパークのメンバーとして認証され、世界ジオパークに向け、活動をしています。そこで、高知地学研究会は、室戸ジオパークの活動を応援し、高知大学副学長の吉倉紳一先生の指導のもと、高知県高等学校教育研究会とともに2回の地学巡検を実施し、大盛況のうちに終了しました。第1回巡検は前回報告していますので、今回は、第2回巡検の報告です。

第1回は、新村海岸、室戸岬という、見学コースが整っていて、観光コースにもなっている場所を選んで巡検しました。そこで、この第2回は、地質の裏名所ともいえるべき、プロの地質・岩石学者が今も研究の対象にしているフィールドを選びました。加えて、安芸郡奈半利町および室戸市吉良川町の町並み、佐喜浜八幡宮の『にわか』も見学しました。

前は日帰り巡検でしたが、今回はメニューが充実しているので、一泊研修にしました。名づけて、『一泊二日 室戸 海の幸食べ放題の旅』です。宿は、室戸岬最南端の民宿『室戸荘』にお願いしました。室戸荘については、後に述べます。

参加者は、高知地学研究会および高知県教育研究会の会員、総勢14名。(初日のみ参加が6名、二日間参加が8名)です。予定では、地元の業者さんのバスを借り切っていくことになっていましたが、人数がそろわずにバスをキャンセル、各自の自家用車相乗りとなりました。



図1 記念写真

(撮影 竹内 康治氏)

2 室戸市の地質

室戸市は、全域が四万十帯南帯に属し、ほぼ東西に延びる椎名・奈良師断層によって大きく二分されます。断層の北は室戸半島層群、南は菜生（なばえ）層群です。

前者は北から、①奈半利川層、②佐喜浜メランジュおよび③室戸層に、後者は北から、④日沖複合層および⑤津呂層に区分されます。（甲藤ほか(1991)）

これらの5つの地質帯のうち、陸源性堆積物（タービダイト）は①、③および⑤、遠洋性堆積物（メランジュ）は②および④です。

②佐喜浜メランジュには大規模な玄武岩体が分布します。

④日沖複合層にはオリストリス（異地岩塊）の四十寺山層が混在します。

④日置複合層および⑤津呂層の紀伊水道沿いには塩基性岩体が貫入します。

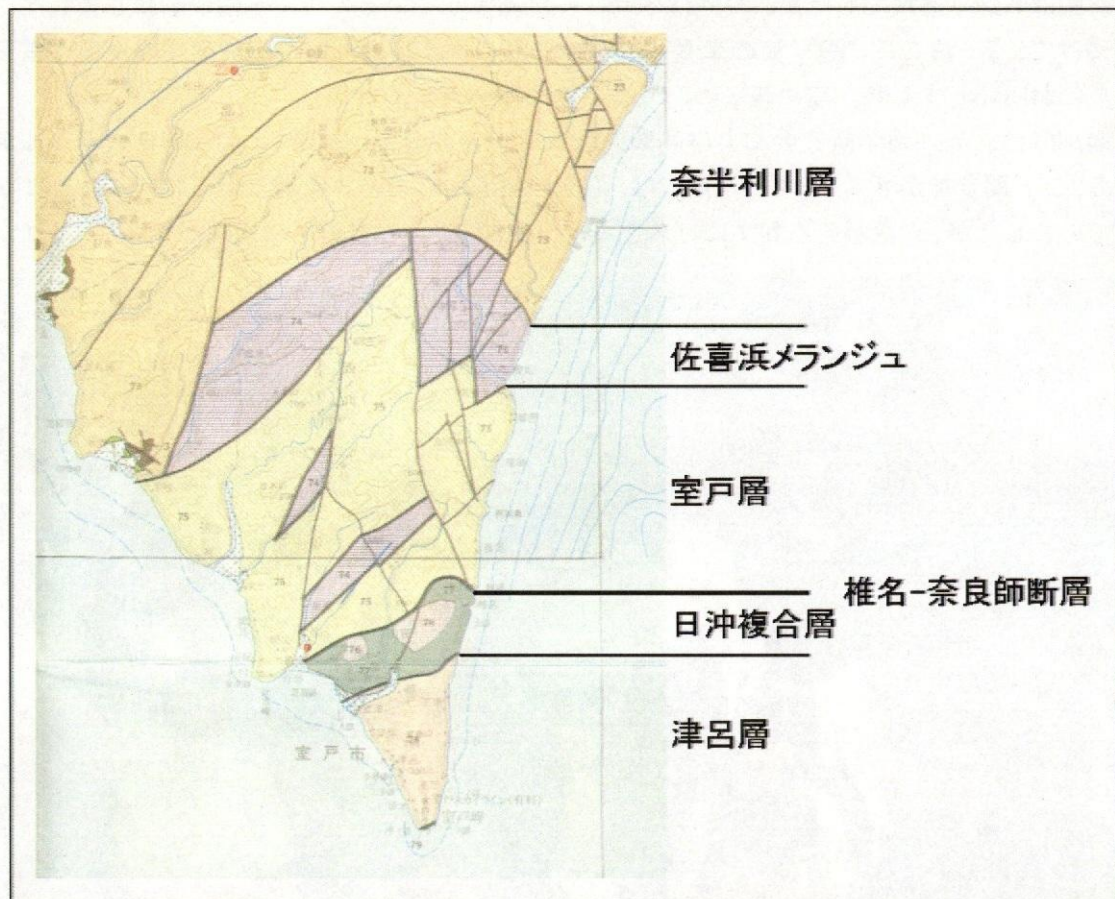


図2 室戸の地質区分 甲藤ほか（1991）に加筆

今回の巡検は主に、④日置複合層および⑤津呂層に貫入する塩基性岩体を観察します。

なお、上述の津呂層は、北から津呂層（狭義）、坂本層および岬層に細分することがあります。

3 巡検概要

(1) 安芸郡奈半利町の町並み

今回の巡検は、地質学のみではなく、室戸ジオパークを応援するために、文化遺産等についても学習しようと、高教研歴史部会の先生方にもご協力をいただき、町並みを見学させていただきました。案内役は高知北高校の畠中美穂先生です。私どもは普段岩石ばかり見ているせいか、頭が固くなりすぎているようで、歩けば石垣の石に目を奪われ、これはどこの河原あるいは海岸から持ち込んだものか?等と考えてしまいがちですが、今回の巡検では、そういった自然物に恵みを得ながら生活してきた人の匠の技や流通・政の血なまぐさい熱い思い等々にも触れることが出来ました。そして、奈半利の町並みを歩きながら古い建造物や歴史的イベントについて伺っていくうちに、人々の生活の匂いや風習、歴史の厚みを感じ、頭も心もすっかりリフレッシュしたことでした。

以下、見学した住宅等をご紹介します。写真は、案内していただいた畠中先生の資料からいただきました。また、説明文も一部引用させていただいています。

東山家住宅

現在、薬局に改装された蔵が写真に写っていますが、伝統的な商家の佇まいで、格子と戸袋がついており、敷地の東端に明治期の石塀が約3m残っています。他の石塀部分の基礎は南海地震にも堪え、同様に切り込み接ぎ（きりこみはぎ）の石積みで造られています。

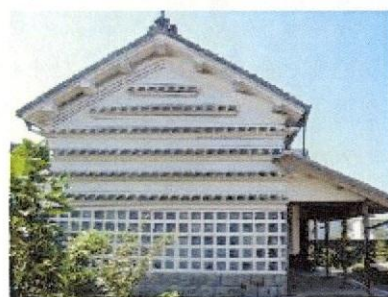


濱田典弥家住宅

濱田家は大地主の住宅で、周囲は川原石などを積み上げた石塀で囲まれています。山内一豊が野根山を越えて奈半利に入った時、道案内をしたのが濱田七郎右衛門であったということです。

写真壁の下方に見られる模様（方形の平瓦を貼りつけ、その目地に漆喰をかまぼこ形に盛り上げたもの）は、町の所々に見られましたが、「海鼠壁（なまこかべ）」という名称で呼ばれます。

風雨に強いというメリットもありますが、美しくとてもおしゃれな印象でした。



高野山真言宗正覚寺

お寺といえば、町の少し高見台的なところに作られていることが多いのですが、正覚寺は町の真ん中に広い敷地を持っていました。神亀年間に僧行基が開山した寺で、弘法大師が四国修業の際に立ち寄り、人々を加持祈祷で救ったといわれます。山内一豊が土佐入国の際にも、宿泊所として利用したそうです。

まず、境内の南に厚さが1m近くもある石垣があり、その重厚さに驚きました。表側からも裏側からも石が積まれていて、間に土が入っています。石組みの美しさもさることながら、地震等にも相当強そうな印象でした。岩石は海岸線で拾ってきたものではないかと推測されました。また、庭に入ってみると、何故か気になる立派な丸石（鉄分含有）がごろごろしていて、参加者らで相当の価値になるのでは?と話したことでした。



竹崎家住宅（高田屋）

現在喫茶店を営んでいらっしゃる高田屋さんは、かつて樟脳業で栄えた商屋の竹崎家住宅であったということで、お蔵のある立派なお住まいでした。平屋建ての主屋は古木を使った落ち着いたあるしつらえで、明治23年頃の建築と伝えられます。

南に庭があり、高田屋さんのご主人が夏に涼しいシトをまく（土佐弁）竹の装置を作っていたらしいです。

北は土間と蔵前をかね、水切り瓦のつく蔵が建っています。竹崎家の蔵は堅牢に築かれた石垣の上に建ち、外壁に下見板張りとし水切り瓦が付いた美しい形をしています。中には高田屋ギャラリーなるお宝があるということでしたが、今回は、時間の都合で割愛しました。蔵の入口は防犯のため家屋内部にあり、災害に備えて蔵屋根の一部は二重になっています。東側には外から出し入れ可能な旧冷凍庫があり、昔は氷を販売していたので氷小屋と呼ばれていたそうです。

現高田屋のご主人のお祖父さんに当たる方はかの寺田寅彦との交友があり、寺田からその人となりやある事件について聞き知った夏目漱石は、小説「坊ちゃん」の登場人物のひとりにその方のエピソードをそのまま引用して描いているということでした。

余談ですが、今回は、巡検の帰りに再度立ち寄り、喫茶で思い思いの飲み物を堪能いたしました。私は、フランス製の紅茶をいただきましたが、その色の美しかったこと、ガラスのカップに透き通る赤い色が古民家の深い落ち着いたとマッチしてとても印象的でした。



浜田家住宅（増田屋）

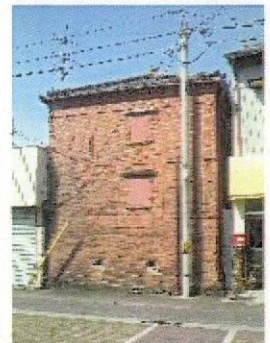
寛政7年（1795）創業の奈半利を代表する老舗で造り酒屋と質屋を営んでいたといひます。1階のなまこ壁、2階の水切り瓦などの特徴があります。

大蔵は酒が醸造されていた頃の面影を残し、隣接する蔵は米や道具などの貯蔵庫として使われてたようです。



浜田家レンガ蔵（増田屋）

煉瓦の赤が一際目立った建造物です。増田屋は江戸期の豪商で、店舗と煉瓦蔵は明治後期の建築と伝えられており、この煉瓦は、木材を大阪あたりへ運んだ帰り、船のバランスを取るための積み荷として持ち帰ったものです。煉瓦蔵は店舗の背後に建てられ、屋根は奇棟造の棧瓦葺、2階建てで、現在、外壁のレンガ積みは鉄帯で補強されています。中にはいることは出来ませんでしたが、回り階段があるということでした。



野根山街道

濱田家住宅前の狭い道は、東洋町まで続く野根山街道の始まる場所であり、少し西側にある高札場（横町）を起点に、一里塚……が残されています。昔は参勤交代の藩主の休み場であり、賑わいがあったことでしょう。国司、流人の移動、調庸物搬出の道として開発され、約1270年前の昔にはすでに利用されていたといひます。戦国初期、長宗我部氏が四国制覇

のための軍略路として通い、藩政時代は参勤交代の通行路となり、幕末の激動期には、中岡慎太郎をはじめ志士達の脱藩の道、二十三日動乱の道……と、時代とともに歴史の要路として、重要な役割を果たしてきた街道です。この静かな土佐の道は、昔を偲ぶのに良い環境で残されていると思いました。今度機会があればぜひ野根山街道を歩いてみたいものです。

齋藤家住宅

蔵は昭和初期に建てられたものですが、昭和23年設立の奈半利町農業協同組合の倉庫として利用されていたそうです。妻面は腰壁に下見板張りで、土佐漆喰の壁に水切り瓦、明かり取り用の窓に鉄製の扉が付いています。



野村家住宅

藩政時代に土佐藩への年貢米を集めた「蔵床」と呼ばれた場所で、大正11年頃の建築です。

主屋の妻面は腰壁に下見板張りで、その上の土佐漆喰の壁に3段の水切り瓦がついています。浜石を詰め込んだ練り積みの石塀が特徴で、入り口内部には曲線を描く石塀があります。



森家住宅（旧野村茂久馬邸）

地元出身で「土佐の交通王」と呼ばれた実業家・野村茂久馬の邸宅で、大正7年頃の建築です。

主屋は2階建・入母屋造・浅瓦葺で、和風を基調としながらも道路に面した西面は奈半利でも珍しい下見板張りに「上げ下げ窓」の洋風デザインです。屋敷は浜石を練り積みした石塀で囲われています。

私たちが見学していると、主屋から顔を出した女性が声をかけてくださいました。2階座敷は南から北に、8畳・12畳・8畳・10畳と4室並び、間の襖を取り除けば38畳の大広間になるとのことで、その後、料亭が営まれていた時期があったり、結婚式場として使用されたりしたということでした。



森家住宅の東側にある
レンガアーチ門と石塀

西側の下見板張りの壁に
つく洋風の上げ下げ窓



この家を設計した野村茂久馬は大正8年に資本金1万円で野村組自動車部を興し、現在の高知県交通や高知通運の前身ともなった旅客、貨物の運送事業を営んでおり、フォード車の黒のボディーに「の」のマークをつけ走らせていたということです。翌年、アメリカの自動車王から日本での代理店をやって欲しいと指名されましたが、「わしは、土佐の野村でええ……。」と断っています。高知尋常中学校の同窓生であった浜口雄幸が「東京へ乗り出さんか。」と誘った時も首を縦に振らなかったといひます。彼の土佐への想いがそれだけ深かったのか……。後年、野村はこんな言葉を残しています。「おらばあ、忍んだ者は他にあるかや。よう忍んで戦うた。」と

藤村製絲株式会社

大正6年に藤村米太郎が創立し、平成17年まで操業していた工場だそうで、たまたま巡検当日は休みで、閉めてるだけのような気がしました。

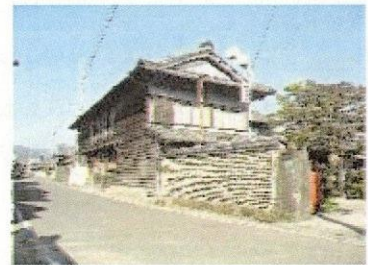
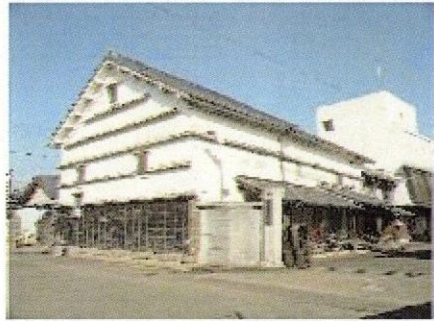
西蔵は明治期の酒蔵を移築したもので、土佐漆喰の壁に水切り瓦が六段つき、繭の貯蔵庫として使われていたとのこと。内部のトラス工法も見なかったのですが外側だけ。

石堀も明治後期頃のもので、浜石の半割りと丸石のまの練り堀が、敷地周囲を取り囲み、県下でも他に類のないものです。

平成19年に工場、倉庫が「近代化産業遺産」に認定されたということです。

そういえば、昔母が和裁をしていたとき使っていた糸の巻板に「藤村製糸」と書いてあったような記憶があります。会社は、昭和17年8月、南米のブラジルに進出し、フジムラード＝ブラジルとして長い間培ってきた日本の高い技術力を海外で生かし、大正時代から続いた藤村の糸を作り続けているということです。

この近所に住んでいたことがあるという参加者も居て、別な視点で町を新発見していらっしやいました。

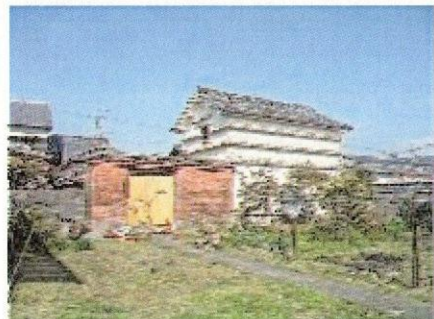


西尾家住宅

主屋は藩政末期の建物と伝えられ、旅籠屋を営んでいました。

大正期に上部に棧瓦をのせた背の高いレンガ堀や主屋の2階部分が増築され、中庭を台所（カマヤ）・2階蔵・納屋・便所などがとり囲み、昔の屋敷構えを知ることができます。

明治7年（1874）2月の佐賀の乱に敗れ、高知で捕らえられた江藤新平が投宿したというエピソードが残っています。



食わず柿

高知県天然記念物に指定された樹齢推定百年の柿の木を拝見しました。内の薄い果皮を外の堅い皮が包み込むような二重構造になっているため「二重柿」と呼ばれているそうです。どんな味なのか気になりますが、渋が抜けず食べる事はできないそうです。また、中身の様子を確認しようとしたのですが、落ちていた実は完全にズクになっていて、残念ながら見ることは出来ませんでした。

かつて奈半利中学校の教師が、いたわりの心・思いやりの心を育てようと、果皮の状態を、子どもの姿と置き換えて、「弱い子を包む強い子 二重柿」という川柳を作って授業したのだそうです。心暖まる教材ですね。



(2) 室戸市吉良川町の町並み

吉良川町の案内は、地元で吉良川の町並みボランティアをしておられる細木さんという女性の方。この方は、実際に吉良川の白壁の家に住んでおられるので、通りいっぺんでない、生の案内が期待できます。では、彼女の案内をご紹介します。

① 吉良川の旧国道に建つ白壁の家

吉良川が明治、大正時代に木炭で栄えたころにできた町並みです。歩くだけで、心が和みます。ハイカラさんが下駄を鳴らして歩いていても、おかしくない場所です。

② 屋根瓦の葺き分け

瓦の葺く方向は、町並みの北側と南側で、違います。北側の家は『へ』の字に、南側の家は逆『へ』の字です。この並べ方により、台風通過時の東風による雨水の浸入を防ぐことができます。

③ 水切瓦とコールタール

壁面についている3～4段の瓦屋根が水切瓦です。強風による横からの雨が家の横面を濡らして劣化させるのを防ぐためのものです。

第二次世界大戦中、アメリカ軍の本土空襲に備え、白壁にはコールタールが塗られました。だから当時は、吉良川は黒壁の町並みでした。そのコールタールが一部残っています。

④ 理髪店

この理髪店は、映画『私は貝になりたい』の現地ロケで使われる予定でした。しかし、主演の中井正広さん、仲間由紀恵さんが紅白歌合戦の司会で日程がとれず、中止になった経緯があります。昭和初期の雰囲気を残す、とてもなつかしい造りで、店は今も現役です。

⑤ 旧郵便局

吉良川の郵便局は国道に移りましたが、この旧庁舎は、一見の価値があります。特に屋根瓦にご注目ください。発見の楽しみを残すために、ネタばれは避けておきます。

⑥ 石垣 (いしぐろ)

吉良川の海岸からこぶし大の円礫を取ってきて、それを半分に割って作った石垣です。隙間は漆喰と赤土を混ぜたものです。ときどきヘビが入り込みますので、ご注意ください。なお、今は円礫の採取は禁止されています。



図3 吉良川のいしぐろ

(3) キラメッセ

『室戸の海の幸、食べ放題の旅』第一弾として、道の駅キラメッセのレストラン食遊館で、特にお願いした料理が待っていました。その日の漁獲しだいで決まるという、幹事にも分からないお楽しみメニューです。テーブルには金目鯛をはじめ、室戸の海の幸が満載、参加者の歓声が上がります。あまりの興奮に、誰も記録ができず、また、写真撮影もされていないので、詳細ははぶきますが、東京や大阪なら4,000円~5,000円でもおかしくない、素晴らしく美味で新鮮な料理でした。

このお店には、高知市からわざわざ、往復5,000円もかけて訪れる人もいます。

(4) 三津『こすもくん』の火山角礫岩（遅沢壮一(2006)、溝口秀治ほか(2009)

いよいよここから地学ジャンルの巡検となります。

丸山の海洋深層水研究所前には、斑レイ岩のシル（sil 岩体）が貫入しています。そこから800mほど北の喫茶店『こすもくん』まで、玄武岩のダイク（dike 岩脈）が伸びています。

「晴れたる青空 漂う雲よ」

それは第九やがな

「大阪城は誰が建てた?」「ダイクさん」

それは大工さんやがな

閑話休題

私（南）がこの岩脈を知ったのは、喫茶店経営者のKさんからの質問でした。Kさんは、私が行った室戸高校開放講座『2008ジオパーク室戸に向けて(2008/7/31開講)』に参加され、自宅の庭の特異な岩石について質問をされました。そこで私が現地におもむいて調査し、庭の石はハイアロクラスタイト（hyaloclastite 水中自破碎溶岩）もしくはピローブレッチャ（pillow breccia 枕状角礫岩）の転石であると、結論付けました。その結論をもとに、勝手にジオパーク説明看板を作り、Kさんに贈呈したところ、Kさんはその説明文を喫茶店内に掲示してくれました。その看板がこれです。

現地に行ってみると、こすもくんは、まさにこの岩の上に乗っています。家を建てるとき、その岩のあまりの硬さに施工業者が破壊できないので、結局、その上に建てたとか。これなら、地震がきても大丈夫でしょう。

この岩体は、溝口ほか(2009)により丸山ドレライト（dolerite 粗粒玄武岩）と名づけられ、モルブ（MORB 中央海嶺玄武岩）に判別されています。

判別は、玄武岩中の単斜輝石に含まれる微量元素の量から化学判別図にあてはめて行われました。図5の2つの化学判別図をご覧ください。これらによると、丸山ドレライトは両図とも、MORBの領域にあります。海嶺が海溝に沈み込むという稀有な現象が起こったものと思われます。

室戸ジオパーク

室戸市三津

ハイアロクラスタイト

こすもくんの『水中自破碎溶岩』



こすもくん



当地から南に800mの海洋深層水研究所前の海岸には、斑れい岩の岩床があります。この岩床からマグマの岩脈が延び、海底に噴出しました。それが、この岩体です。

マグマが海底に噴出すると、海水によって急冷され、俵の形をした枕状溶岩になったり、水中で破碎してハイアロクラスタイト(水中自破碎溶岩)という岩石になったりします。ここでは、そのハイアロクラスタイトが観察できます。直径が10cm以上の玄武岩の角礫を観察してください。

図4 室戸ジオパーク こすもくん案内看板

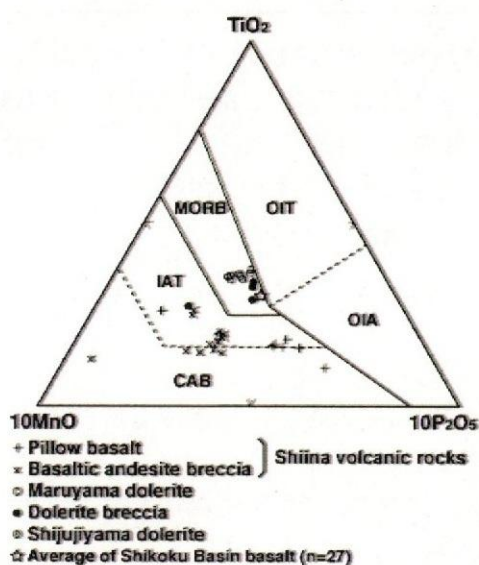


Fig. 9. TiO_2 - 10MnO - $10\text{P}_2\text{O}_5$ diagram (after Mullen, 1983) for the Shikoku volcanic rocks, the dolerites and average of Shikoku Basin basalt. Data of Shikoku Basin are from Wood et al. (1980) and Siena et al. (1993). OIT: ocean-island tholeiite, OIA: ocean-island alkali basalt, IAT: island-arc tholeiite and CAB: island-arc calc-alkaline basalt.

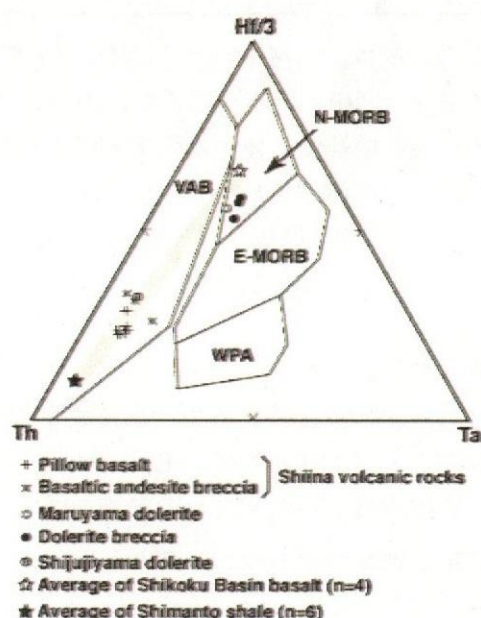


Fig. 10. Hf_3 -Th-Ta diagram (after Wood, 1980) for the Shikoku volcanic rocks, the dolerites, average of Shikoku Basin basalt and average of Shimanto shale. Data of Shikoku Basin are from Hickey-Vargas (1998); data of Shimanto shale are from Sano (1999). VAB: volcanic-arc basalt and WPA: alkaline within-plate basalt.

図5 溝口ほか(2009)の化学判別図



図6 室戸市三津 喫茶こすもくん前の火山角礫岩（横：30cm）

この岩脈は、1,400万～1,500万年前、当時の室戸沖の海底下約1 kmに貫入した斑レイ岩シル（sil 岩体）がダイク（dike 岩脈）を上方に伸ばし、海底に噴出したもので、その一連の塩基性岩体が地殻変動によって北に傾斜したものと考えられます。（なお、「北に傾斜」は海洋深層水研究所前の斑レイ岩体から判断できますが、説明は略します。）

なお、巡検中、Kさんがちょうど自宅から出てこられ、旧交を温めることができました。人と人のつながりって、いいですね。

(5) 日沖の枕状溶岩

この枕状溶岩は、転石ではありますが、20～30mと大きく、また国道から容易にたどり着くことができるので、室戸ジオパークの目玉となると思います。

この溶岩は、川添晃先生の詳細な説明がありますので、そちらを参照してください。

<http://www.kochinet.ed.jp/muroto-c/tikikyouzai/sizen/hioki/hioki.htm>

この岩体は、溝口ほか(2009)により椎名火山岩類（Shiina volcanic rocks）と定義され、含まれる単斜輝石の化学組成から島弧玄武岩（island-arc tholeiite）に判別されています。つまり、この地では、中央海嶺玄武岩と島弧玄武岩が近接するという現象が起こっているわけです。そして少し北には、この二者のどちらとも起源を異にする（かも知れない）佐喜浜玄武岩が。



図7 日沖枕状溶岩

(6) 三津の玄武岩岩脈（遅沢壮一（2006））

この岩脈は、レストラン魚菜亭のすぐ南を流れる小川に沿って行くと、すぐ分かります。

案内は、遅沢によって、2006年地質学会高知総会の巡検見学旅行案内書に詳しく掲載されています。この案内文は、ネットに公開されています。

<http://www.geosociety.jp/faq/content0035.html>

本文を一部引用します。

「坂本メランジェを貫く玄武岩岩脈が観察される。坂本メランジェも、岩片サイズではあるが、チャートや玄武岩の外来岩塊を含み、また剪断されており、木村（2001）の定義に従えば、典型的なテクトニックメランジェである。」

当日はことのほか温かく、穏やかな日でした。波打ち際で潮騒を聞きながら岩石をぼーっと眺め、吉倉先生の抑制されたバリトンの響きを堪能していると、心がすっかり洗われ、満ち足りた気分です宿に向かったことでした。

(7) 室戸荘

① 『室戸の海の幸食べ放題の旅』第二弾

宿は民宿「室戸荘」です。室戸荘は、民宿の団体「室戸食遊808」の中心メンバーであり、各地の地質を勉強してお客さんを案内するなど、ジオパーク活動にも協力してくれています。ジオパーク案内は息子の安岡弘之君（ひげの若旦那）が主にしてくれています。また、おかあさんの安岡英子さん（森三中の大島美幸そっくり美人）は植生に造詣が深く、ボランティアガイドの植生指導者です。

夕食と朝食は、そのおかあさんに無理を言い、海の幸豪華組み合わせとしました。ここでは、何もかもが美味しく、特にカツオのタタキのあまりの旨さに、思わず質問してしまいました。

「おかあさん、このタタキ、どこで焼いたの？」

「うちで焼きました。」

一同、感動。

「わらで？」

「割り箸で。」

割り箸とは・・・これは、味にも環境にもいいですね。

「これは、料理のヒットエンドランやー。」（彦麻呂風に）

「ヒットエンドラン ヒットエンドラン」（鳥居みゆき風に）

② 二次会

食後は、大部屋で、地学の学習会です。室戸斑レイ岩のプレパレートと簡易偏光顕微鏡が用意され、鉱物のかなでる魅惑のハーモニーが皆の目を楽しませてくれました。そして、いつの間にか、幹事がスーパーまで買い出しに行つて揃えたアルコール類の数々。異様に目を輝かせる女性陣。

以下、記憶が霞んでいます。かろうじて、明日の日の出が6時ということを確認して就寝。

③ ダルマ朝日

目が覚めると、5時55分。日の出直前です。同部屋の幹事二人は海岸で日の出を待っている模様。今から急いで出ていっても間に合いません。でも、部屋は東向きです。窓から日の出が見えました。太陽の下縁が水平線から離れた直後の、ダルマ朝日。初めて見ました。

「感動した！ おめでとう！」

④ 乱礁遊歩道と句会

2日目の出発前、おかあさんにお申し、遊歩道の植生の観察をしました。岬特有のウバメガシ（馬目樫）やトベラ（海桐）、アオノリュウゼツラン（青の竜舌蘭）などを観察しましたが、特筆すべきは次の植物。

『ハマナタマメ（浜肩刀）』

浜に多生するマメ科ナタマメ属の植物。会員の興味はもっぱら、食えるの？ おかあさんのお返事は、「残念ながら食べません。」でも、毒はないようなので、料理しだいでは何とかなるかも知れません。将来のジオパークレシピを乞うご期待。

『シオギク（潮菊）』

黄色い可憐な花を咲かせるキク科キク属の花。外来の『ノジギク（野路菊）』との交配が進み、固有の主の存在が危ぶまれます。そのため、つい先日ノジギクの駆除が実施されました。その案内を受けたのですが、所用で出席できず、残念。なお雑種は、白い舌状花を持つので、容易に区別できます。

⑤ 山田邸

おかあさんの口利きで、特別に山田邸の見学ができました。昭和25年の昭和天皇の室戸行幸の際の宿舎にもなったという、すばらしい邸で、特筆すべきはその庭園。室戸海岸段丘の伏流水を導いた池や数々の木々の静けさに、世俗を忘れ、幽玄郷を十分に楽しむことができました。この庭は個人の所有なので、難しいでしょうが、何とか公開の方向に持っていけないのでしょうか。

(8) 夫婦岩

夫婦岩は、室戸市中心部から車で10分ほどの、鹿岡（かぶか）にあります。

遠目では、岩体が4つなのですが、それは歴代の国道拡張に伴う切り通しのため。本来の夫婦岩は、しめ縄のかかっている海側の2岩です。

これらの表面には、大小さまざまな穴が観察できます。これは蜂の巣状構造（honey-comb structure）といい、強い風や波によって風化されたものです。

しめ縄が張ってあるから、近くにいけないのかな、とうっかり漏らすと、さっそくわれらがモーリィが堤防を降りようとしします。それだけはやめてくれ、君に何かあったら潤ちゃんが泣く、と言って、全員で押さえつけ、何とか押し止めました。ふうー、危ない、危ない。

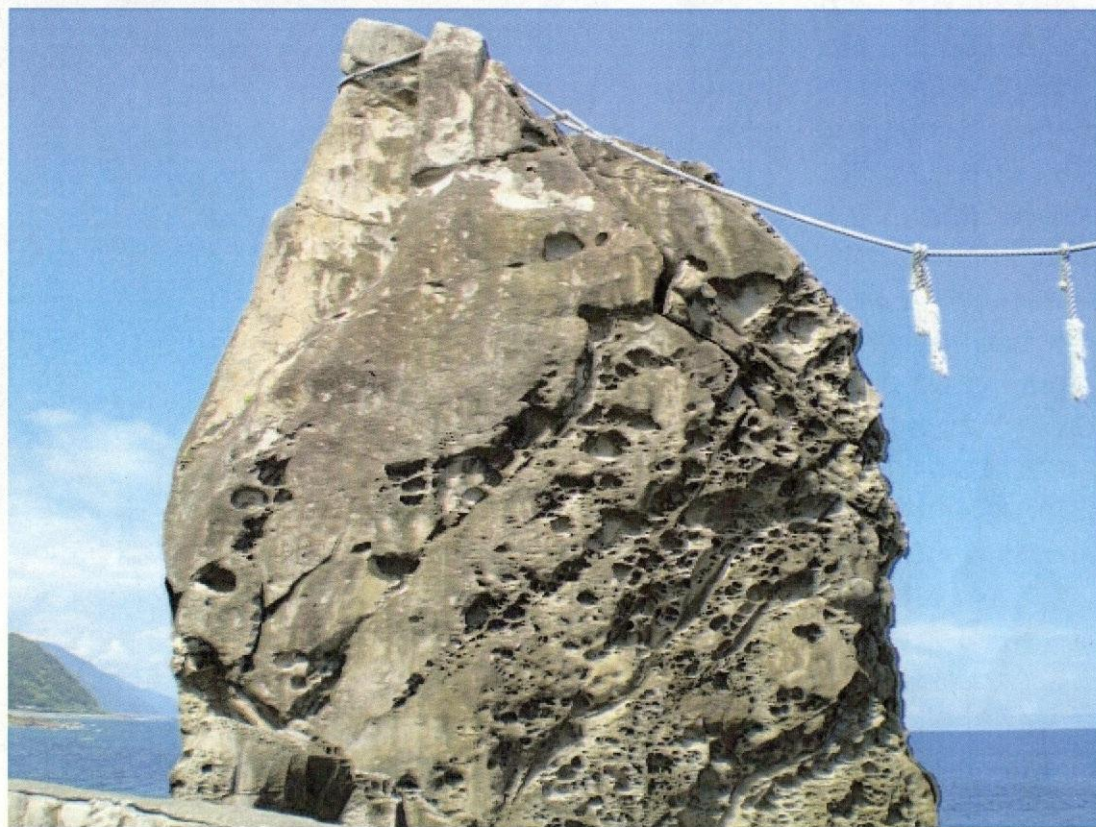


図8 夫婦岩の蜂の巣状構造

疑問が一つ。この夫婦岩、どちらが夫でどちらが妻でしょうか。どなたかご存知でしたら、教えてください。

(9) 佐喜浜にわか

お神祭は本当に久しぶりでした。小さい頃は踊りに参加したり、綺麗な着物を着せてもらったり、お客のご馳走にありついたりと思い出深いものですが、酔たんぼは苦手でした。佐喜浜八幡宮のお神祭当日、お獅子が飛び上がったり寝ころんだりする度に衣装に多数つけられた小さな鈴がシャンシャン…この優しい音色に遠い日の記憶を呼び起こされ、我が故郷はどうであろうかと何かそこに忘れてはならない大切なものを置き忘れていたような感覚におそわれたことです。この室戸ジオパークの良さは、地質・地形など地球がくれた財産とそこに生活してきた人間の築いた文化等が融合されて、訪れる人にその土地ならではの良さを提供するとともに、そうした人やものとの出会いによって観光客自身の住まいする土地との

違いに気づき、それぞれの良さを再発見することにあるのではないかと思います。今回の巡検を通して、ジオパークの何たるかに少しだけですが、触れられたことに感謝しています。2回連続して巡検を行った意義が見えてきました。

さて、佐喜浜地域については、平成20年度総代会長であった池田恒徳さん夫妻に巡検下見の時からご大変お世話になりました。不案内な私たちのために手書きの地図を下さったり、当日は八幡宮の参道脇に立派な栈敷席を用意していただいたりのご厚意に甘えさせていただきました。心よりお礼を申し上げたいと思います。また、佐喜浜にわか歴史については高知女子大学佐藤恵里教授にご説明いただきました。佐藤先生とは、それまでお会いしたことがなく、お電話で何度か打ち合わせしただけでしたので、沢山の見物人の居る中で無事にお会いできるか不安だったのですが、約束時間を少し回って現れた先生は、長身細身の素敵な女性でした。

古いフラフを小屋の骨組みに掛けてこしらえた見た目も美しい栈敷席に



撮影(上下写真):谷内康弘氏

集まった皆は、もうすっかり気分も最高だったのですが、小さな机を囲んでお話を伺いました。俄芝居の発祥が11世紀の猿楽に遡る可能性、それが近畿地方との船の交流によって佐喜浜にもたらされたであろうことや、18世紀前半頃から郷と浦との若者が15歳になると大人としてのお披露目を兼ね神事をこなす役目を与えられたこと、祭りの前に当屋と呼ばれる宿に入り、中宿のものがお獅子を担当したが当時は血を見るまで荒れなければならなかったなど、祭りが現在の姿になるまでをわかりやすく解説いただきました。

「佐喜浜俄」は毎年新しい題材を用いて作られており、「落とし」のあるのが特徴です。H21年のネタは、全国版の「政権交代」「麻薬で逮捕された酒井法子」など報道を賑わせていたもの、また地元小学生による子ども俄では「佐喜浜小学校の校長先生」「総代の池田さん」らが登場。吹き出すぐらいメイクもばっちりで感心致しました。土地の方から後継者が少なくなった、町を離れるものが増えたなど悩みも伺いましたが、どうして、まだまだ室戸の若者は力があると羨ましく感じました。それを見守る大人たちも、この日、温かい目をかなり細めていたように思います。



(10) 室戸のお買い物

3時、巡検終了。ジオパークの会に出席する吉倉先生と別れ、巡検メンバーは、お買い物タイムです。

室戸のお魚なら、港の横の浦戸屋さん。皆さん、目の色を変えて、美味しい魚を物色しています。ほんの20分ほどで、合計で福沢さんが数人は飛んでいきました。その晩は、各家庭で、室戸の幸に舌鼓を打ったことでしょう。室戸の地元産業へのご支援、ありがとうございます。おかげで、僕たち私たち室戸市民は生活できます。室戸市長小松になりかわり、お礼を申し上げます。なお、浦戸屋さんの2軒ほど隣りに、高知の地酒が何でも揃う酒屋さんがあるのですが、うっかり通過してしまいました。現地ガイドとしてまことに申し訳なく、ここでお詫びします。今度、ご自分で行ってください。それから、喫茶「シットロト」や「蔵空間茶館」も何気に通過しました。次回に期待しましょう。

さて、ツアーは続く。

旅の最後は奈半利町の竹崎家住宅、高田屋さん。何でも、昨日の見学のときに、「明日、帰りに寄る」と約束していたそうで、最後にコーヒーで打ち上げました。この竹崎さんの数代前のご当主が、寺田寅彦氏と同級で、そのご当主の遺品が土蔵に展示されているそうです。でも、さすがに時間切れです。メンバー一同、もう一度来ることを固く誓い、名残り惜しくも同地を出発しました。

4 おわりに

このように、室戸ジオパーク巡検は大好評のうちに終了しましたが、室戸の地質の見所はこれだけではありません。東は佐喜浜のメランジュから西は羽根のタービダイトまで、そして北の段丘地形と貫入火成岩から南は岬の共役断層や酸性凝灰岩まで、変化に富んだ地質・地形がいたるところに展開しています。これらを十分に調査・研究して巡検コースを作り、皆さんを案内することができたら、これに過ぎる喜びはありません。

室戸は今、世界ジオパーク認証に向け、懸命に努力しています。今回の活動が世界ジオパーク認証に役立つことを願っています。

ありがとうございました。

文献

- 甲藤次郎, 波田重熙, 岡村 眞, 田代正之, 平 朝彦, 寺戸恒夫(1991): 高知県温泉水脈推定基礎地質図, 高知県保健環境部衛生課
- 溝口秀治, 君波和雄, 今岡照喜, 亀井淳志(2009): 室戸岬地域における中新世の海溝近傍火成活動, 地質学雑誌, 115,1,17-30
- 遅沢壮一(2006): 室戸岬, 菜生コンプレックスのメランジュと岩脈, 日本地質学会第113年学術大会見学旅行案内書! 地質学雑誌, 112,Supplement,7-7,41-53

(文責 室戸高等学校 南 寿宏 高知小津高等学校 森岡美和 (奈半利町 佐喜浜にわか))